

大丈夫當如此也

高祖沛豐邑中陽里人。姓劉氏，字季。父曰太公，母曰

劉媪。其先劉媪嘗息大沢之陂，夢与神遇。是時，雷電晦

冥。太公往視，則見蛟龍於其上。已而有身，遂產高祖。

高祖為人，隆準而竜顔，美須髯，左股有七十二黒子。

仁而愛人，喜施，意豁如也。常有天度，不事家人，生產作

業。及壯，試為吏，為泗水亭長。廷中吏無所不狎侮，好酒

及色，常從王媪・武負・酒。醉臥，武負・王媪見其上，常有

竜怪之。高祖每酤留飲，酒讐數倍。及見怪，歲竟，此兩家

常折券棄責。

高祖常繇咸陽，縱觀觀秦皇帝，喟然太息曰：「嗟乎，大

丈夫當如此也。」

(高祖本紀)

【書き下し文】

高祖は、沛の豊邑の中陽里の人。姓は劉氏、字は季。父は太公と曰ひ、母は劉媪と曰ふ。其の先、劉媪嘗て大沢の陂に息ひ、夢に神と遇ふ。是の時、雷電して晦冥なり。太公往きて視れば、則ち蛟竜を其の上に見る。已にして身有り。遂に高祖を産む。

高祖人と為り、隆準にして竜顔、須髯美しく、左股に七十二の黒子有り。仁にして人を愛し施しを喜び、意豁如たり。常に大度有り。家人の生産作業を事とせず。壮に及び、試みられて吏と為り、泗水の亭長と為る。廷中の吏をば、狎侮せざる所無し。酒及び色を好み、常に王媪・武負に従ひて酒を貰す。酔ひて臥すに、武負・王媪、其の上に常に竜有るを見て、之を怪しむ。高祖酤ひて留まり飲む毎に、酒の饗るること数倍す。怪を見るに及び、歳の竟はりに、此の両家常に券を折り責を弃つ。

高祖常て咸陽に繇す。縦観して、秦の皇帝を観る。喟然として太息して曰はく、「嗟乎、大丈夫に此のごとくなるべきなり。」と。

【口語訳】

(漢の) 高祖は沛県豊邑の中陽里の人である。姓は劉氏、字は季。父を太公といい、母は劉媪という。その昔、劉媪は大きな沢の堤(の上)で休息し(てうたた寝をし)、夢(の中)で神と遇った。この時、雷(が鳴って)稲妻が起こり、(あたりは)真っ暗になった。太公が行つてよく見ると、蛟竜が媪の上に(蟠って)いるのを見た。やがて(媪は)身ごもった。かくて高祖を産んだ。

高祖の人となりは、鼻筋が高く竜のような顔立ちで、顎ひげと頬ひげが美しく、左の股には七十二の黒子があった。情け深い性格で人を慈しんで施しを好み、心が広く大きかった。いつも大きな度量があった。家人の(行う)生産作業に従事しなかった。三十歳(の壮年)になると、用いられて役人となり、泗水の宿駅の長となった。役所の中の役人たちについて、(高祖が)軽んじて侮らない者はなかった。(高祖は)酒と女色を好み、いつも(居酒屋の)王ばあさんや武ばあさんのところで、酒をつけにして買っ(て飲んでい)た。(高祖が)酔って寝てしまうと、武ばあさんや王ばあさんは、その上にいつも竜がいるのを見て、不思議なことだと思った。高祖は(酒を)買つて(店に)留まって飲むたびに、酒の売り上げは数倍になった。(また、上に竜がいるという)不思議(なできごと)を見ていたため、歳末に、この両居酒屋ではいつも借用証を破り借金の取り立てをやめた。

高祖はかつて(秦の都)咸陽で労役に従事した。(その時行幸を)自由に見物し、秦の(始皇帝を見た。(すると高祖は)大きいため息をついて言った、「ああ、男子たるものはこのよう

になるべきだなあ。」と。